

鞠智城出土・銅造菩薩立像についての考察

村上 幸奈

鞠智城跡出土銅造菩薩立像（以下、本像）は、平成二十年（二〇〇八）十月、熊本県山鹿市・菊池市に所在する鞠智城跡の貯水池跡底部から出土した総高約一三センチメートルのごく小さな仏像である。本研究では、本像の制作年代について再検討し、造形的特徴の一つである持物の問題と制作背景について考察を行った。

まず、本像に関する先行研究を概観し、白鳳時代に制作された宝珠捧持形菩薩の一例に位置付けられれていること、制作背景として山城の祭祀に関連する遺物や百濟系渡来人の念持仏であつた可能性が想定されていることを整理した。

次に、令和四年（二〇二二）九月に行つた調査の結果をもとに本像の造形的特徴を挙げ、類似作例との比較から、本像の制作年代については白鳳時代を基準とできると推定した。

これまで本像については、特殊な持物の形態と執り方から、宝珠捧持形菩薩という枠組みの中で検討されることが多かった。しかし、国内外に現存する同形式の菩薩像や、宝珠及び舍利容器の実際の作例との比較を行つてみると、本像を宝珠捧持形菩薩の一例であるとは必ずしも断定できない可能性が浮上した。

そこで、改めて本像の持物と手元について検討を行つたところ、新たな持物の解釈の一つとして、瓶型の容器である水瓶を提示した。水瓶は僧侶の日常的な携行品として使用され、後に仏具として広く用いられてきた。また、本像とはやや形式が異なるものの、腹前で水瓶を執る仏像も複数確認することができた。古くから水瓶を執る種々の仏像が制作される中で、両掌の上に水瓶を載せる菩薩像が一部で制作されたことも想定できよう。

本像が出土した鞠智城跡貯水池跡については、先行研究で飲料水の確保や貯木場のほか、水勢の制御という役割を担つていたことが想定されている。古代山城の維持管理において水勢の制御は大きな課題であったと考えられ、当時の人々が山城での水害への恐れを克服するためや、水害で亡くなつた人々への追善のために神仏の力を借りようとするのは自然なこととも考えられる。本像については、従来の見解である宝珠捧持形菩薩という枠組みから一度離れることで、鞠智城における貯水池の造営を背景に、水瓶を腹前で持つ菩薩像として制作された可能性も浮上してくると言えるのではないだろうか。

鞠智城出土・銅造菩薩立像についての考察

村上 幸奈

はじめに

鞠智城跡出土銅造菩薩立像（以下、本像とする。）（第1・2図）は、平成二十年（二〇〇八）十月、熊本県山鹿市・菊池市に所在する鞠智城跡の貯水池跡底部から出土した総高一二・六センチメートルの

ごく小さな仏像である。現在は熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館が所蔵し、例年秋頃に一般公開されている。

鞠智城跡では、本像のほかに仏教関連の出土品は見つかっておらず、また、国内に残る古代山城のうち、明確な状態で貯水池跡が確認されているのは鞠智城跡のみとされる（西住 二〇一四）ことからも、本像の出土は鞠智城跡だけでなく古代山城の研究において大きな意味を持つと思われる。しかし、本像が現在地に伝来した経緯や、貯水池跡から出土した理由についてはよく分かつていらない。

本像の造形における最大の特徴は、腹前で掌を上にして持物を捧げ持つ点である。本像はこの造形的特徴から、蓮台付きの円筒舍利容器を持つ宝珠捧持形菩薩の一例として注目されてきた。しかし、令和四年（二〇二二）九月に実施した調査で改めて本像を実見したところ、持物についての異なる解釈が浮上した。本像の造形及び制作背景については、宝珠捧持形菩薩と切り離して再度考察する必要性が出てきたと言える。

本稿では、まず先行研究を概観し、問題点を整理する。次に、本

像の造形的特徴から制作年代を推定し、持物とその執り方について再検討を行う。最後に、本像の制作背景について試論を加えてみたい。

一 先行研究の整理

平成二十年（二〇〇八）十月二十三日、鞠智城跡貯水池跡底部の土中から菩薩立像が出土した。出土地点は、池尻部という池の構造中最も重要な箇所であり、土層は特にしまりが強い印象であったと。出土時、本像は頭部を西に向けた仰向けの状態で検出された。黄土色の被膜に覆われ、一部は内部の銅鑄が露出しており、右体側を垂下する天衣遊離部は出土当初から欠失していたことが報告されている（熊本県教育委員会 二〇〇九）。

出土後、本像について最も詳細な考察を行ったのは、大西修也氏である。大西氏は、本像の三面頭飾や簡略化された天衣の表現形式等から、白鳳時代^①の菩薩像に共通した作風を示すとした。

また、大西氏は、本像の持物を円筒舍利容器と解釈し、両掌の上に持物を載せる形式（第3図）は、朝鮮三国時代の百濟仏や飛鳥・白鳳仏に作例の多い宝珠捧持形菩薩との密接な関係を窺わせるものであるとして、中国南朝系の舍利供養菩薩が確認されている百濟系仏像の一例と位置付けた。鞠智城が七世紀に築城された朝鮮式山城



第1・2図
熊本・鞠智城跡出土銅造菩薩立像（正面・背面）

の一つであるとの指摘があることからも、本像は百濟からの渡来人によって鞠智城に持ち込まれた念持仏で、個人的な供養を目的として制作された可能性があるという（大西二〇〇九）。

矢野裕介氏は、本像の出土地点とその状況について報告した。出

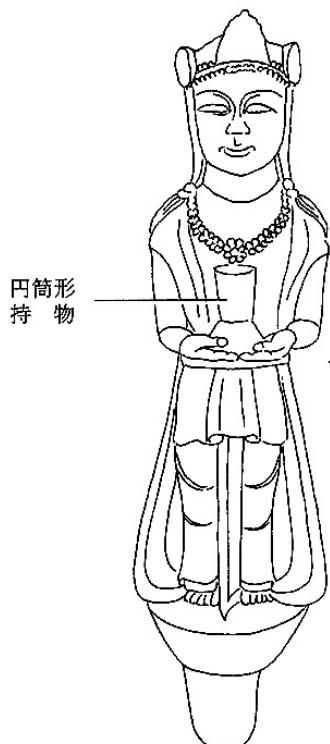
土状況から原位置を保っていないことが明らかであり、仏像という遺物の性格上、廃棄されたとは考え難いとした上で、近隣に仏堂があつたか、地鎮等の祭祀に関連する遺物であった可能性を示した。その理由として、貯水池跡池尻部から約二〇〇メートル谷下に位置する「飛渡」に鞠智城の北外郭線が通っていること、さらにその谷筋には地形的な理由から城門などの施設が推定されていることを挙げた。池尻部における池の排水量の調整は、城の維持管理の要所で

あつたと考えられるという（矢野二〇一〇）。

九州における百濟仏教の伝来経路について検討した有働智奘氏は、六世紀の百濟で舍利信仰が隆盛し、觀音信仰も付随して日本へ伝播したことを取り上げ、本像が鞠智城跡で出土した背景には百濟から伝播した菩薩信仰がある可能性を述べた。また、古代肥後ににおける初期仏教は六世紀半ばから在家仏教の形態で百濟から伝來したものと推測し、本像は念持仏として個人の邸宅に安置された仏像であるとした（有働二〇一四）。

イ・ジヤンウン氏は、本像の造形が百濟系仏像に類似することや、「秦人」銘木簡や男性器型の木製品とともに貯水池跡から出土したこととに注目し、鞠智城の貯水池が山城の祭祀と関連していた可能性を示した（イ二〇一九）^②。

以上のように、本像の制作年代は概ね白鳳時代と推定されている。制作背景については、百濟からの渡来系氏族の念持仏として制作された可能性のほか、貯水池跡の出土地点や他の遺物との関係か



第3図
鞠智城跡出土銅造菩薩立像 推定復元図
(大西修也氏作成)

ら、山城の祭祀との関わりがあつた可能性も示されている⁽³⁾。また、

大西氏により提示された宝珠捧持形菩薩の一例であるとする見解を前提として考察が行われる傾向があるように思われる。

まずは本像の造形表現に着目し、制作年代を推定した上で、図像的特徴に関しては改めて検討をする必要があると言えるのではないだろうか。

二 制作年代の推定

(二) 鞠智城跡出土銅造菩薩立像の概要

本研究の実施にあたり、令和四年（二〇二二）九月十五日に本像の調査を行つた⁽⁴⁾。まずは以下に報告する。

【法量】（単位・センチメートル）

総高（頭飾頂～柄）	一二・六
像高（髻～台座蓮肉縁）	一〇・四
像高（頭飾頂～台座蓮肉縁）	一〇・六
頂～頸	二・七
面幅	一・七
耳張	一・九
腹厚（手を含む）	一・五
蓮肉幅	二・六
柄幅	一・一
柄の出	一・七
天衣の張（現状）	三・一

【形状】

菩薩形立像。髻を表す。髻は低めで、後方横に伸びる形。頭部は体に比して大きい。髪際は正面一文字形。背面は左右振り分け状に表す。頭飾を着ける。頭飾は三面頭飾で、正面は蓮弁形。左右は現状、円形花形か。左右円形の飾りから帶状のものが肩に垂下する。これは冠繪を示すか、垂髪を示すかは、現状不明瞭。左方では肩あたりで括りをつけ、先端が傘状に分かれて垂下する。したがつて垂髪を示すか。耳は髪で隠れている。眉は弧状。目は現状窪みで表す。現状目尻をやや下げるか。鼻の部分は盛り上がる。鼻は短め。現状、口は口端を上げる形に見える。頸の括り、三道は確認できない。

天衣、裙を着ける。天衣は背面両肩をややU字状を描いて帶状に渡る。正面で両肩に下がり、両腰脇から垂下し、蓮肉上で後方に一旦たわんで蓮肉上に至ることが左方で確認できる（右方は欠失）。裙は下半身を覆い、背面に一段の折り返しが確認できる。正面では打ち合わせ等不明瞭。正面中央下方、両脚部に帶状をなして蓮肉に至る部分が確認できる。背面、横に腰帶状のものが見える。天衣部に衣文一条。背面裙の折り返し左方に縦の衣文線。背面の裙にも衣文状の縦の窪みが確認できる。

胸部に横の帯状の盛り上がりが確認できる。胸飾を示すか。両腕を屈臂し、両掌を上に向けて指先を中央につける形を示す。現状、指を重ねるかは不明瞭。両掌の上に円筒状の持物を載せる。円筒状の持物の下方は末広がりの形を示す。

肩をやや後方に引き、腹を前に突き出す。両足先の痕跡は現状見られない。

台座上に直立する。台座は蓮肉が鉢形をなして、下方に蓮茎をつ

ける。全体的に漏斗形を示す。蓮茎は柄としての機能があると見られる。

【品質・構造】

頭体幹部、蓮肉、蓮茎、天衣垂下部を含めて一铸で铸造する。無垢である。铸造は蠅型か。鍍金の状况は不明。左方の天衣と体部の間を透かす。天衣の右方の垂下部消失。

（二）類似作例との比較

先述のように、本像は鞠智城跡貯水池跡底部の土中から出土したため、一部を欠失している上、全体の造形が不明瞭となつており、制作当初の様子を明確に読み取ることは難しい。

本項では、前掲の調査結果をもとに本像の造形的特徴を取り上げ、類似する特徴を示す作例との比較から、制作年代を推定してみたい。

【頭部、面相部】

本像は体に比して大きい頭部に三面頭飾を着ける。現状、宝冠表面の装飾は確認できないため、尊格を判別することは困難である。面相部は、弧状の眉や窪みで表す目が確認でき、目尻をやや下げて口端を上げる明るい表情に見える。また、鼻が短く幼い顔立ちである。口が鼻の近くに表されるのに対して、口から頬までの距離が長く、たっぷりとした輪郭を持つ丸顔であるのも本像の特徴と言える。このように童顔で明るい表情や三面頭飾を着ける造形は、白鳳時代の金銅仏に見られる特徴の一つとされている。

大阪・觀心寺觀音菩薩立像は、明るい表情を示す金銅仏の典型例と言える。この像は、東京・根津美術館が所蔵する光背の銘文から、齊明天皇四年（六五八）の制作と考えられている（西川一九七八）。本像よりも顔立ちがはつきりしているように見えるものの、丸顔で幼く明るい表情、三面頭飾を着ける点は本像に通じている。また、肩を引き腰部を前に突き出した姿や、腹前で持物を執ることで腕を直角に曲げる点も共通する。頭部が比較的小さく長身であることから、觀心寺像を朝鮮半島系の新様式を示す作例と位置付ける見方もある（鷺塚一九八七）。

島根・鰐淵寺觀音菩薩立像は、台座の銘文から、持統天皇六年（六九二）に願主・若倭部臣徳太理によつて父母の菩提を弔うために造像されたことが知られる。頬の丸い童顔の面相部は白鳳時代の典型的な表現としてしばしば紹介される。弧状の眉や目、円満な表情、丸みのある輪郭が本像と共通する。

なお、鰐淵寺像の長身のプロポーションや両頬の張つた額の狭い面貌等の表現について、新羅仏からの影響を指摘する先論がある（松原・田邊一九七九）ものの、近年では、兵庫・一乗寺像との共通性から、中国・隋の彫刻に影響を受けた可能性も想定されており（山口二〇一五）、種々の様相を呈する白鳳仏の造形の源流を定めることの困難さを示す作例とも言えよう。

【姿勢】

本像は肩を引いて腰を大きく突き出すことで、体全体がS字形を描く姿勢をとる（第4図）。このような姿勢は、奈良・法隆寺夢殿觀音菩薩立像（救世觀音）に代表される飛鳥・白鳳時代の菩薩像に

よく見られるもので、先述の大坂・觀心寺像にも確認できる。

奈良・法隆寺に伝わり明治時代に当時の皇室に献納された法隆寺献納宝物（東京国立博物館蔵）には、七世紀を中心とする小金銅仏が含まれており、「四十八体仏」と称されている。

このうち、法隆寺献納宝物第一七〇号（第5図）は、本像と比べて細部の表現が細やかではあるものの、大きな頭部と側頭部から肩に垂下する垂髪、三面頭飾、腰を大きく突き出す姿勢等、多くの部分が類似している。顔立ちは面長でやや古風であるものの、二重瞼の目や天衣の流麗な表現から、七世紀前半から後半への過渡期的作品と位置付けられる（東京国立博物館 一九八七）。

また、第一七一号は、腰を大きく突き出す姿勢や、天衣の先端をたわませる形が本像に似るが、やや粗雑な印象や正面觀にも腰をひねる動きが加わっていること等から、八世紀に至るものとする見解



第5図
東京国立博物館蔵
法隆寺献納宝物 第170号 銅造菩薩立像



第4図
鞠智城跡出土
天衣の先端部

がある（東京国立博物館 一九八七）。

このように見ると、正面觀では直立していながらも側面觀に抑揚をつけた本像の造形は、飛鳥時代初期からは一歩進んだ表現であるものの、八世紀には至らない時期のものと考えられる。

【天衣】

本像の天衣は両肩にかかり、両脇から蓮台に向かって垂下する。天衣の右側は欠失しているが、後方に向かって弧を描いた天衣の先端部分を蓮台上に載せる形が左側に確認でき、左右対称の造形であつたことが想定される。

両脇から垂下する天衣の先端が前方に大きくたわむ表現が特徴的な作例として、奈良・法隆寺觀音菩薩立像（百濟觀音）が挙げられる。古代に遡る資料が現存せず、伝来や制作年代になお疑問が多い像であるが、中国・龍興寺跡出土石像群のうち、北齊から隋にかけての作例に見られる腰高の体軀や装飾性を抑えた裙の表現と類似することから、北齊・北周から初唐の様式を受容して生まれた白鳳様式初期の像と位置付ける見方がある（三田 一〇一〇）。なお、屈臂して掌を上にする右手には枘穴が残ることから、如意宝珠を捧持していたと仮定する修理技術者の証言（西村 一九八七）があり、宝珠捧持形菩薩との関わりも示唆されるることは興味深い。

また、まっすぐに垂下する天衣の表現は、法隆寺献納宝物第一七九・一八八号に見ることができる。これらは童顔の面相や短い体軀が特徴的な像で、白鳳時代に流行した童形像の典型例として取り上げられるものである。天衣の裾が蓮台上に載る点や、三面頭飾を着ける点も本像と類似する。さらに、天衣先端部に同様の処理をする

ものとして、先述の第一七〇号も挙げられる。

以上、本像の造形的特徴を取り上げ、共通点を見出すことのできる代表的な作例を概観した。現状では本像の詳細な造形を読み取ることは難しいものの、各部に七世紀半ばから後半の作例と近い造形を見出すことができた。従来の見解の通り、本像の制作年代については、白鳳時代を基準に考えて良いと思われる。

三 宝珠捧持形菩薩についての検討

(二) 先行研究の整理

本像の特殊な持物と手元の形式について検討する前に、宝珠捧持形菩薩に関する先行研究を概観してみたい。

宝珠捧持形菩薩は、腹前もしくは胸前で宝珠やそれに準ずる容器を両手で捧げ持つことから名付けられた形式の仏像である。この形式の起源については複数の先論がある。

まず、中国・四川省成都万仏寺跡から出土した石像群（四川博物院蔵）中に宝珠を捧持する脇侍が表されることや、北朝には同形式の像が確認できることから、宝珠捧持形菩薩の形式は南朝が起源であるとする松原三郎氏の説（松原一九六七・一九七一）がある。これを久野健氏、西川新次氏が支持した（久野一九七〇、西川一九七一）。

次に、町田甲一氏は、松原説に対する批判として、奈良・法隆寺夢殿救世觀音像を例に、同形式は北魏様式が展開する中で発生した可能性を示し、南朝のみならず北朝の作例にも同様の形式が存在することを指摘した（町田一九七六）。

さらに、八木春生氏は、松原氏が例に挙げた成都万仏寺跡出土石像群が捧持する持物には蓋や横線が表されていることから宝珠とは言えず、盒子のような容器であると解釈した上で、同像の形式は日本や百濟で見られる宝珠捧持形菩薩とは別物として、宝珠捧持形菩薩の起源は百濟にあると結論付けた。また、その背景には、成都万仏寺跡出土石像群等に見られる手元の盒子型容器を宝珠と見間違えた百濟の工人の存在だけでなく、救濟を強く求める觀音信仰の隆盛があつた可能性を示した。なお、八木氏は、両手で持物を執る像は南朝・北朝どちらにも存在しており、キジール石窟やガンダーラにも確認できることから、両手で持物を執る形式 자체の起源は西方にあるとしている（八木一九九二）。

八木説を受けて西方の作例に注目した後藤怜氏は、仏伝中の使者が両手で捧持する持物が仏舍利であること、それらの形式が中国の作例と類似することを指摘した。また、ガンダーラの供養者像中に北朝の作例とよく似た舍利容器を捧持する像があることからも、宝珠捧持形菩薩の起源は中国・南朝ではなくガンダーラにあり、それらの祖型像が舍利の崇拜供養を意味していた可能性を示した。なお、後藤氏は、仏伝中の「舍利分配」以降の場面では、それまで円形であつた舍利容器が円筒状に表されることや、ガンダーラの供養者像が捧持する舍利容器が円筒状で横線の入つたものであることを指摘している（後藤二〇〇六）。

また、宝珠捧持形菩薩の尊格の問題についても、諸先学による研究がある。

石田尚豊氏は、觀音菩薩の中に弥勒淨土への先導的な役割を担うものがあることを指摘し、それが宝珠捧持形菩薩である可能性を提

示した（石田 一九七四）。

金理那氏は、銘文中に宝珠捧持形菩薩の像名を確認できる例はなく、図像的特徴から尊格を明らかにすることは難しいとして、宝珠捧持形菩薩を初期觀音像の一形態と解釈した。宝珠を捧持する形式は、觀音菩薩が超越的な存在であることを確認させると同時に、信仰を深める機能を持つという（金 一九八五）⁽⁵⁾。

これらの説を踏まえ、宝珠捧持形菩薩の成立について詳細な考察を行った大西修也氏は、奈良・法隆寺夢殿救世觀音像が裝飾的な宝珠様の容器を執るよう、宝珠捧持形菩薩は宝珠捧持を祖型として成立したのではなく、舍利供養をシンボライズした図像の延長上に現れるものと結論付けた。宝珠捧持形菩薩の展開は、六世紀前半の中国に始まり、宝珠とは認められない持物から明確な宝珠表現への変化や、脇侍から単独像への変化を見せながら、百濟を経由して七世紀後半の日本へ至つたと考えられるという。また、この形式の仏像が百濟や日本で多く制作された背景には、六世紀に流行した弥勒信仰における舍利供養を要する兜率往生を土台として、觀音菩薩に自らの罪を懺悔することで兜率往生を願う思想の流布があるとした（大西 二〇〇一）。

以上のように、宝珠捧持形菩薩については、その図像の源流と尊格に関する研究が主として行われてきた。「宝珠」捧持形菩薩と称するものの、必ずしも宝珠を執っている必要はなく、有蓋の容器等を執るものも同形式に含むとする見解が多く見られた。これらの図像の源流については、中国、朝鮮半島、西方とする説があり、定説を見ていかない。また、その尊格は、弥勒信仰に関わる觀音菩薩または初期の觀音菩薩と位置付けられている。

(二) 現存作例との比較

本像は両掌を上にして持物をすくうように捧げる特異な形式を示し、持物の形状は円筒状の下部に末広がりの台のような部分を表す珍しいものである。

本項では、国内外に現存する宝珠捧持形菩薩や周辺作例との比較を行い、本像が同形式に含まれるかどうかを検討してみたい。

【中国】

先述のように、中国・四川省成都万仏寺跡出土石像群（四川博物院蔵）中の普通四年（五二三）銘釈迦文石像（第6図）等の脇侍には、宝珠捧持形菩薩が確認できる。これらの持物は一見宝珠のような球形であるが、刻線があることから有蓋の容器と推定され、両手で包むように執る形式を示す。

アメリカ・個人蔵武平三年（五七二）銘四面石仏碑像の脇侍菩薩像は、やや長めの盒子型容器を両手で上下から包む形で捧持しており、これを円筒状の舍利容器と解釈することもできるようと思われる。

響堂山石窟に伝來したことが知られるアメリカ・フリア美術館石造菩薩立像は、宝珠または蓮の蕾のような持物を両手で包むように執る。なお、斜めを向き両掌に持物を載せて捧げる菩薩や供養者の図像は敦煌莫高窟壁画中に複数確認できるが、これらを宝珠捧持に含むかどうかは検討の余地があると思われる。

このように、中国では南朝を中心に宝珠捧持形菩薩が多く見られるが、北朝にも少なからず同形式を示す遺品が認められる。現存作例が限られているため、その様相をつかむことは難しい上、先述の



第6図 中国・四川博物院蔵
四川省成都万仏寺跡出土普通四年銘釈迦文石像

ようにも成都万仏寺跡出土
石像群を宝珠捧持形菩薩
に含めない見解もある
(八木 一九九二) こと
から、各作例の位置付け
については慎重に行うべ

く含まれていることは注目すべきであろう。

また、六世紀半ばから後半にかけての制作とされる韓国・窺岩面新里出土銅造菩薩立像は、かつて幅広の扁平な容器型の持物を上下から包むように執っていた可能性があることが報告されており、中國・南朝における球形の舍利容器の系譜に連なる作例と位置付けられている（大西二〇〇二）。

七世紀の作例としては、上下から包むように球形の持物を執る韓國・定林寺跡出土塑像菩薩像の両手残欠（国立扶余博物館蔵）や、左現状一部が欠失しているものの上下の指先で持物を執っていたと思われる韓国・陵山里寺跡出土塑像菩薩立像断片（同博物館蔵）、左手で球形の持物を下から支え、右手を正面斜め横から添えるように執る韓国・瑞山摩崖仏脇侍菩薩像等、塑像や摩崖仏にも作例が確認できる。

韓國

韓国では、特に百濟地域で出土した仏像に宝珠捧持形菩薩が確認される。

早い例として、六世紀後半頃とされる韓国・瑞山龍賢里出土銅造菩薩立像（国立扶余博物館蔵）がある。この像は現状単独像となつてゐるが、三尊像の右脇侍にあたると考えられ、胸前で上下から包

の天衣が特徴的であるが、これは朝鮮三国時代の初期菩薩像に共通

して現れる特徴とされてゐる（金一九八五）。後述するように、日本国内の宝珠捧持形菩薩の作例にも、鰐状の天衣を持つ作例が多

日本

日本には飛鳥・白鳳・天平時代を中心として、小金銅仏の作例が多数現存しており、日本各地に分布している。その中に宝珠を捧持

する菩薩像も複数確認できることから、日本での形式が流行したこととは明らかと言える。

奈良・法隆寺には、夢殿救世觀音像をはじめとして、後述の大宝藏殿像、聖靈院聖德太子坐像胎内仏や、法隆寺献納宝物第一六五・一六六・一六七号等、複数の宝珠捧持形菩薩が伝来した。

聖德太子の姿を写した仏像とされる夢殿救世觀音像は、火炎と蓮華座で装飾された宝珠型の容器を両手の指先をひねるように執る特殊な形式を示す。先述の韓国・瑞山摩崖仏脇侍菩薩像が宝珠を捧持することや、救世觀音像の光背に表される雲気をまとった塔が多宝塔と見なされることから、『法華經』とそれを解く釈迦と関わりの深い菩薩像と位置付ける説がある（長岡 二〇一二）。

法隆寺献納宝物第一六五号は、両手で包むように球形の持物を執る。台座の銘文から白雉二年（六五一）の作と考えられ、宝冠に化仏を表すことから觀音であることが分かる。また、ほぼ同一の形式であるものの、柔和な顔立ちを示す作例として第一六六号が伝えられている。なお、これらは韓国・瑞山龍賢里出土像や夢殿救世觀音像と同様に、鱗状の天衣を外側に大きく張り出す点が特徴的である。

第一六七号は、上下から持物を執るが、持物が手の間で浮くように表現されている。先述した第一六五・一六六号とは異なり、細く表された天衣や、鱗を多用した瓔珞の表現が特徴的で、中国・隋の影響が窺えることが指摘されている（岩佐 二〇一二）。

このように、法隆寺に伝来する作例のみでも、七世紀における宝珠捧持形菩薩の造形の多様性を見るができるものの、本像と同形式を示す作例は残っていない。

先述の大坂・觀心寺像は、上下から包むように球状の持物を執る一般的な宝珠捧持形菩薩として知られる。光背に残された銘文の内容から、亡き夫のために阿弥陀像を作った女性が夫と父母の極楽浄土往生を願つたことが明らかであるが、觀心寺像のほかに阿弥陀如來の脇侍であることが分かる宝珠捧持形菩薩はなく、貴重な作例である。

鹿児島・日置郡吹上町上田尻伝来の銅造菩薩立像（黎明館藏）は、宝珠を上下から包む一般的な形式をとつており、奈良・横井廃寺出土銅造菩薩立像との類似が指摘されている（八尋 二〇〇七）。九州に現存する宝珠捧持形菩薩として注目すべき作例であるものの、江戸時代以前の伝来については明らかとなつておらず、畿内豪族の念持仏として持ち込まれた可能性（竹森 二〇一二）や、八世紀における中央集権国家体制の地方拡大に伴い起つた百濟系氏族の地方移住政策に関連する作例とする説（大西 二〇一三）が提示されている。なお、吹上町伝来像は九州で発見された宝珠捧持形菩薩として本像と比較される作例であるが、鱗状の天衣や頭部の小さい造形等、持物の執り方以外にも異なる点が多く見られ、同列視できるか否かについては慎重に判断する必要があると言える。

さらに、これらの作例とは異なつた形式で持物を執る例もある。

奈良・法隆寺大宝藏殿觀音菩薩立像は、大きく表された手で両側面から宝珠を執る。杏仁形の目や鱗状の天衣等、飛鳥仏の典型例として知られており、両手で持物を執る形式は中国・南朝に類例があるという（鷺塚 一九八七）。

奈良・法起寺菩薩立像は、右手を上、左手を下にしてそれぞれの指先で宝珠をつまむ特異な形式を示す。法隆寺大宝藏殿像と同様に

鰐状の天衣が古風である。先述の法隆寺献納宝物第一六五号に作風が近いことが注目されるが、より柔軟な表現であることから朝鮮系の請来品である可能性も提示されている（東京国立博物館 一九八七）。

奈良・法隆寺聖靈院聖徳太子坐像の胎内仏である觀音菩薩立像は、本像と同様に両掌を上にして球形の持物をすくうように執るものとして注目すべき作例である。この像の持物の中央には二本の刻線があることから有蓋の容器と解釈され、聖徳太子坐像が獅子吼する口元近くに安置されていることからも、舍利供養のために制作されたとする説がある（大西 二〇〇一）。

このように、日本国内には多くの宝珠捧持形菩薩やその周辺に位置付けられる作例が現存するものの、本像と同様に両掌ですくうようには持物を執るものは法隆寺聖靈院像のみであった。また、多くが韓国の作例と同様に鰐状の天衣を着けており、本像とは異なる特徴を示していた。

以上、国内外に現存する宝珠捧持形菩薩とその周辺作例を概観した。作例の大半は上下から持物を包むように執る形を示しており、

一部に変化例が認められるものの、本像と同様の手元を示す作例は国内に一例認められるのみであった。また、持物については、宝珠と思われる球形の持物や有蓋の容器を執る作例が主流であり、円筒状部分の下に末広がりの台がある持物を執る例は見出すことはできなかつた。

(三) 宝珠と舍利容器

次に、宝珠捧持形菩薩の主要な持物である宝珠と舍利容器について概観し、実際の作例を確認してみたい。

宝珠は、サンスクリット語及びパーリー語の「mani」の音写である「摩尼」を訳した「摩尼宝珠」で、「如意摩尼（cinta-mani）」とも呼ばれている。「摩尼」には真珠、宝物の意味があり、「如意摩尼」には、想像上の宝物、意のままに物を生ずる珠玉という意味がある。

宝珠の形態は、原初的には宝石の結晶のような縦長の六角形であつたものの、やがて珠玉を表現した球状の宝珠が現れ、中国で広まつていつたとされている。また、宝珠は光明を象徴するものでもあると考えられ、葱花形の光焰が表されるようになつていつた。これは今日でいう球体の上部を尖らせた宝珠の形態の祖型であるといふ。日本では、仏像の持物や光背の装飾として、蓮華上で光焰を発する球状の宝珠が見られるが、ただの球体として表されるものもあり、宝珠とはあくまで球状のものと認識されていたと思われる。また後に、葱花形の光焰を宝珠と誤解したことで、葱花形の宝珠も定着した可能性があるとされる（齋藤 二〇一四）。

舍利容器は仏陀の骨である仏舍利を入れる容器で、仏塔内部または心礎下に安置されるものである。その形状や材質は国と時代により様々であるが、多くが豊かな装飾を施した入れ子状の容器として制作された。

七世紀頃の遺品としては、中国・甘肅省大雲寺跡出土舍利容器のように素材の異なる箱を重ねたものや、韓国・慶州仏國寺釈迦塔舍利容器（国立慶州博物館蔵）のように箱内に卵型合子等を納めるも

のがある。

また、日本では、百濟からの影響によると考えられている有蓋の銅鏡形を主流として、壺型や箱型のものも確認されている。なお、平安時代以降は仏塔を象る小塔型や五輪塔型が流行した。

先述したように、後藤怜氏は、ガンドーラの供養者像が円筒状の舍利容器を捧持していることを指摘した。後藤氏は、実際のガンドーラの舍利容器に円筒状や壺型が混在していることからも、宝珠捧持形菩薩の祖型がガンドーラにあると結論付けた（後藤 二〇〇六）。

円筒状の舍利容器としては、パキスタン出土舍利容器（千葉・松戸市立教育委員会蔵、三〇四世紀）や、百濟の威徳王関係の遺品として知られる韓国・王興寺跡出土青銅舍利函（国立扶余文化財研究所蔵、六世紀）、伝韓国・慶尚北道慶州南山出土金銅製毛彫三重塔文舍利容器（東京国立博物館蔵、八世紀）等、複数の作例がある。

以上のように、宝珠捧持形菩薩が盛んに制作された六世紀後半から七世紀において、宝珠は球体もしくは葱花状の物体と認識されていた可能性が高いと思われる。また、円筒状の舍利容器はガンドーラや韓国の作例中に確認できるものの、本像の持物のように円筒状部分の下部に末広がりの台を付した舍利容器は見出すことができなかつた。本像の持物をその形状から宝珠もしくは舍利容器と解釈することは、現状では難しいと言えるのではないだろうか。

先述のように、本像と同様の持物と手元の形式を表す宝珠捧持形菩薩の作例が現状見出されていないことも踏まえると、本像については、宝珠捧持形菩薩の一例であることを前提とする考え方から一度離れて考察を進める必要があると思われる。

四 制作背景についての考察

（二）持物の問題について

今一度、本像の手元と持物に立ち返りたい。本像は両掌を上にして持物をすくうように執る。持物は、円筒状部分の下に台のような部分があり、側面から見ると、台部分は丸い膨らみを表していることが分かる（第7図）。

先述のように、大西修也氏はこの持物の形を蓮台付きの円筒舍利容器と解釈した（大西 二〇一三）（第3図）。しかし、宝珠捧持形菩薩の一例という位置付けから離れて本像の持物を見た場合、円筒状の部分の下に膨らみを表現している形狀からは、瓶型の容器を想定することができるのではないだろうか。

本像の持物を瓶型の容器と仮定すると、二つの新たな解釈が浮上する。一は舍利容器の最も内側に籠められる舍利瓶であり、二は水瓶である。まずは二つの容器について確認してみたい。

舍利瓶は、入れ子状の舍利容器において最も内側に籠められるもので、仏舍利を直接入れる重要な容器である。河田貞氏によれば、白鳳時代において、仏舍利を入れる容器はそのほとんどが緑瑠璃製の舍利瓶か舍利壺であり、これを入れ子状容器で何重かに保護するのが通制であったとい



第7図
鞠智城跡出土銅造菩薩立像
手元（側面）

であり、これを入れ子状容器で何重かに保護するのが通制であったという（河田 一九八九）。

法隆寺では、昭

和二十四年（一九四九）に行われた五重塔再建工事の際、五重塔心礎石の上面中央に穿たれた円錐状舍利孔から舍利容器が発見されおり、その内部には中核容器となる緑瑠璃製の舍利瓶が籠められていたという（井上 一九七二）。また、聖徳太子についての伝記である『上宮聖徳法皇帝説』（家永ほか 一九七五）の大和山田寺塔についての記述には、同寺の舍利容器が同様の入れ子構造で制作され、最奥に青瑠璃瓶が籠められていたことが記録されており、当時の舍利容器の様相を窺うことができる。

さらに、先述の韓国・慶州仏国寺出土舍利容器や、同・全羅北道益山王宮里五層石塔発見舍利容器の内側には、緑瑠璃製の舍利瓶が籠められている。こうした重層構造は朝鮮三国を経由して日本に伝來した可能性があるとされている（河田 一九八九、内藤 二〇一五）。

水瓶は本来、僧侶が仏道修行において日常生活を営む上での必需品として携行した僧具の一つであったが、後に仏前供養のための仏具として用いられるようになつた。

水瓶は、その形状から淨瓶、胡瓶、長頸瓶、布薩形水瓶、信貴形水瓶の五種に分類される。この内、本像の持物と類似する長頸瓶は、文字通り細長い首状の部分がある水瓶で、加島勝氏は胴の形状から棗形瓶と柘榴瓶に分類した。これらの水瓶はいずれも源流が中国に求められ、北魏時代から制作されたと考えられている。また、法隆寺献納宝物中に両形式の水瓶が伝わっていることから、日本においても併存していたことが知られている（加島 二〇一一）。

以上のように、舍利瓶と水瓶はどちらも本像の持物に類似する形状であり、本像と同時期の作例を確認することができる。

しかし、舍利瓶は舍利容器において最も重要な部分で、入れ子状の舍利容器の最奥に籠められることから、その存在を目にできる者は多くなかつたと思われる。また、舍利瓶を捧持する仏像については現状類例がない。

一方で水瓶については、僧侶の日常的な携行品であったことや、水瓶を執る仏像が複数確認できることから、容易にその存在を目についたことが想定できる。

国内に現存する注目すべき作例として、和歌山・那智経塚出土觀音菩薩立像（東京国立博物館蔵）及び大分・羅漢寺觀音菩薩立像が挙げられる。これらの作例は、左手で水瓶の頸をつかみ、右手で底部を支える形式を示す。

那智経塚出土像は、和歌山県の那智山から出土した大量の仏教関連遺物の一部と伝えられる。小さめの頭部に対して異様に太い腕や大きな手が特徴的で、童顔の面相や筒状の体軀に白鳳仏の名残を見せるものの、形式化が著しいことから奈良時代初期に下る作と考えられている（佐藤 一九八五）。なお、那智経塚出土遺物には、宝珠を上下から包むように執る一般的な宝珠捧持形菩薩像や、片手で水瓶の頸を掴む像が含まれており、これらとは別種の菩薩像として水瓶を腹前で執る形式が認識されていた可能性も考えられる。

羅漢寺像は、大化元年（六四五）に天竺から渡来した法道仙人が閻浮提金の觀音像を窟に納めたことから始まったと伝わる大分県の羅漢寺に伝來した小金銅仏である。丸顔の面相や筒状の体軀等、白鳳仏の系譜を引く造形を示すことから、新羅様式の影響を受けた七世紀の作例と考える見方がある（松浦 一九八七）。また、那智経塚出土像と同様に、大きな両手や形式化した天衣の表現から、実際

の制作年代は八世紀前半の作と見る向きもある（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 一九九六）。

なお、これらの像と同様に水瓶を両手で執る図像は、敦煌莫高窟第二八五窟北壁（西魏大統五年（五三九））の二仏並坐像脇侍菩薩に確認できる（第8図）。中国から国内の広い範囲に水瓶を胸前で執る菩薩の図像が伝播した可能性を示唆するものと言える。

以上のように、国内外において胸前で水瓶を執る作例が残ることや、本像と同様の持物や手元を表す宝珠捧持形菩薩が現状見出されないことを踏まえると、本像の持物は、特殊な形態の舍利容器や、舍利容器の最奥に籠められる舍利瓶ではなく、水瓶と見ることもできるのではないだろうか。



第8図
中国・敦煌莫高窟 第285窟北壁 二仏並坐像脇侍菩薩

パキスタン伝来の仏伝浮彫「火神堂内毒龍調伏」（千葉・松戸市教育委員会蔵、二～五世紀）には、毒龍と戦う仏陀に村人が壺の水をかける様子が表されており、両掌の上に水瓶を載せる村人の姿が確認できる。また、ガンダーラの菩薩像には水瓶を執るものが多くあり、菩薩の持物として水瓶が一般に認識されていた可能性は高い。古くから水瓶を執る種々の仏像が制作される中で、両掌の上に水瓶を載せる菩薩像が一部で制作されたことも想定できよう。

（二）鞠智城跡貯水池跡について

最後に、本像が出土した鞠智城跡貯水池跡について試論を加えてみたい。

先述のように、国内の古代山城の中で、明確な状態で貯水池跡が確認されているのは鞠智城跡のみとされている。貯水池跡は、鞠智城跡の北側谷部に位置し、谷地形を最大限に利用した形が特徴で、頭部と尻部には約九メートルの高低差が見られることから、堤防状の間仕切りが数か所に設けられていたと推測されている。水の一部は池部以外から取り入れたものであるが、大半は湧き水であった。

西住欣一郎氏によれば、貯水池の造営は七世紀後半から開始され、谷の自然地形を最大限利用しながら、堤防、取水口、排水施設、水路等の構築物を築造して完成したという。池の内部からは七世紀後半から八世紀後半と考えられる建築材等が出土しており、建築材を保管し供給する貯木場としての機能や、飲料水を確保する機能を有していたと考えられている。また、立地条件から、建物遺構が見つかっている長者原地区を中心とした城域の雨水等の調整機能も併せ持っていた可能性があるという（西住 二〇一四）。

全赫基氏は、鞠智城跡貯水池跡と韓国の古代山城に残る集水施設との比較を行った。鞠智城跡貯水池跡は、城内の水源と雨水を効率的に管理することを目的として、百濟系渡来人により伝わった技術を利用して造営されたと考えられるものの、七世紀末頃からは新羅系移民が造営に参加した可能性も考えられることを示した。なお、貯水池跡の機能については、類似した出土遺物が見つかっている韓国・河南二聖山城貯水池跡を取り上げ、韓国に残る古代山城の集水施設における祭儀的行為と親縁性があることを述べた（全二〇二一）。

小山田宏一氏は、鞠智城跡に排水工と減勢工が確認できることから、谷筋の治水を理解した空間計画がなされているとした。また、上流に浅い流域を作る構造からは、現状の理解である貯水池ではなく苑池であつた可能性を示しており、新たな見解として注目すべきものと言える（小山田二〇二二）。

以上のように、先行研究では、貯水池跡の機能の一つとして、谷地を利用した山城の水勢の制御があつたとされている。鞠智城跡と同様に大宰府の防衛拠点であつたと考えられている福岡県・佐賀県の基肄城跡は、水門をはじめとした複数の排水施設を有することでも知られている。古代山城の維持管理において、貯水と排水の調整機能が不可欠であつたことは明らかと言えよう。

現状、鞠智城における水害の記録は見出されていないものの、貯水池跡が城内の水勢を制御する役割を担つていたことを想定すれば、山城での水害に対する恐怖心の克服や、水害により亡くなつた人物への追善を目的として、当時の人々が神仏の力を借りようとするのは自然なこととも考えられる。

鞠智城跡貯水池跡からは、意図的に定置された平瓶や破損した土器片、焼損痕の残る男性器型の木製品等が出土しており、貯水池では貯木場として利用される以前から祭祀行為が行われていたとする見解がある（全二〇二二）。本像が七世紀後半に胸前で水瓶を執る菩薩像として制作された可能性を踏まえると、貯水池跡の出土遺物との関係も考慮すべきように思われる。七世紀後半の鞠智城において、水勢の制御を目的とした貯水池の造営を背景に本像が制作された可能性も想定できるのではないだろうか。

おわりに

以上、本稿では、鞠智城跡出土銅造菩薩立像の制作年代について再検討し、造形的特徴の一つである持物の問題と制作背景について考察を行つた。

まず、本像に関する先行研究を概観し、白鳳時代に制作された宝珠捧持形菩薩の一例として位置付けられていること、制作背景として山城の祭祀に関連する遺物や百濟系渡来人の念持仏であつた可能性が想定されていることを整理した。

次に、令和四年（二〇二二）九月に行つた調査の結果をもとに本像の造形的特徴を挙げ、類似作例との比較から、本像の制作年代について白鳳時代を基準とできると推定した。

これまで本像については、その特殊な持物の形態と執り方から、宝珠捧持形菩薩という枠組みの中で検討されることが多かつた。しかし、国内外に現存する同形式の菩薩像や、宝珠及び舍利容器の実際の作例との比較を行つてみると、本像を宝珠捧持形菩薩の一例であるとは必ずしも断定できない可能性が浮上した。

そこで、改めて本像の持物と手元について検討を行つたところ、新たな持物の解釈として瓶型の容器である舍利瓶と水瓶が挙げられた。舍利瓶は舍利を直接入れる重要な容器で、舍利容器の最奥に籠められることから一般に目にできる者は多くなかつたと想定され、舍利瓶を執る仏像の作例は現状確認できない。一方、水瓶は僧侶の日常的な携行品として使用されており、本像とはやや形式が異なるものの、腹前で水瓶を執る仏像を複数確認することができた。

水瓶を執る種々の仏像が制作される中で、両掌の上に水瓶を載せる菩薩像が一部で制作されたことも想定できよう。以上により、本像の持物に関する新たな解釈の一つとして、水瓶である可能性を提示した。

本像が出土した鞠智城跡貯水池跡については、先行研究で水勢の制御という役割を担つていたことが想定されている。古代山城の維持管理において水勢の制御は大きな課題であつたと考えられ、当時の人々が山城での水害を恐れて神仏の力を借りようとするのは自然なこととも考えられる。本像が鞠智城における貯水池の造営を背景として制作された可能性も想定できるのではないだろうか。

なお、現状失われている本像の台座等の部品が貯水池跡から出土していないことは、本像が貯水池やその周辺にもとから安置されていた可能性を否定するものである。しかし、貯水池跡の発掘は完了しておらず、本像の欠失部のみでなく他の遺物が今後発見される可能性も十分にあると言える。

本稿では、本像の持物に関する可能性の一つとして提示した水瓶と、制作背景として想定した山城での水害及び貯水池造営との関係を言及するに至らなかつた。本像の持物が水瓶であることを前提と

するならば、觀音菩薩の種々の功德との関係性や、本像の制作地について新たな見解を提示できる可能性もある。今後の発掘調査や科学的調査の結果にも注視して、本像の持物と制作背景の問題について検討を続けていきたいと考えている。

本文註

(1) 白鳳時代とは、乙巳の変が起つた六四五年から平城京遷都が行われた七一〇年まで、または法隆寺若草伽藍が焼失した六七〇年から七一〇年までを指す用語である。主に建築史や美術史において、天平時代への過渡期を示す語として用いられてきた。本稿では、七世紀半ば頃から仏像の様式に変化が現れることを踏まえ、七世紀半ばから七一〇年までの約六〇年間を白鳳時代とする見解に準じた。

(2) イ・ジャンウン氏の論文は韓国語によるものため、全赫基氏による要約（全二〇二二）を参考した。

(3) 本像の出土後、複数の研究者が本像についての見解を述べたことが記録されている（熊本県立装飾古墳館二〇〇八）が、本稿では論文形式で発表された先行研究のみを取り上げた。

(4) 調査概要是以下の通りである。

【日程】 令和四年（二〇二二）九月十五日
【場所】 熊本県立装飾古墳館
【対象】 鞠智城跡出土銅造菩薩立像
【目的】 鞠智城跡出土銅造菩薩立像の調査及び撮影
【調査者】 成城大学 教授 岩佐光晴（調査指導）

熊本県文化課 学芸員 村上幸奈

(5) 金理那氏の論文は韓国語によるものため、大西修也氏による要約（大西二〇〇二）を参照した。

参考文献（編著者五十音順）

【論文・解説】

石田尚豊「飛鳥・白鳳時代の小金銅仏」『奈良の寺 法隆寺小金銅仏』（岩波書店、一九七四年）

イ・ジャンウン「鞠智城出土仏像と百濟仏像」『ドンヨン』五（東アジア比較文化研究会、二〇一九年）

井上正「舍利容器」解説『奈良六大寺大觀 第一卷 法隆寺 一』（岩波書店、一九七二年）

岩佐光晴「四十八体仏の世界」『日本美術全集 第二卷 飛鳥・奈良時代 I 法隆寺と奈良の寺院』（小学館、二〇一二年）

有働智奘「古代肥後における仏教伝来—百濟達率日羅と鞠智城出土遺物を中心として—」『平成二十五年度鞠智城跡「特別研究」論文集 鞠智城と古代社会—第二号—』（熊本県教育委員会、二〇一四年）

大竹憲治「河西回廊仏蹟の壁画・塑像に見る水瓶と柄香炉考—特に敦煌莫高窟・安西榆林窟の事例を中心に—」『考古学論究』一九（立正大学考古学会、二〇一七年）

大西修也「[付論] 鞠智城跡貯水池跡出土の銅造菩薩立像」『熊本県文化財調査報告 第二四九号 鞠智城跡総括報告書』（熊本県教育委員会、二〇〇九年）

大西修也「講座⑤ 百濟の仏像」『鞠智城とその時代—平成一四〇二二年度「館長講座」の記録』（熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館、二〇一二年）

大西修也「百濟の仏像と東アジア」『鞠智城シンポジウム二〇一二成果報告書』（ここまでわかつた鞠智城）（熊本県教育委員会、二〇一三年）

大西修也「コラム 鞠智城出土の銅造菩薩立像」『季刊考古学』一三六（雄山閣、二〇一六年）

小山田宏一「渡来系の土木技術とため池・山城」『鞠智城シンポジウム発表要旨二〇二二 渡来系技術から見た古代山城・鞠智城』（熊本県教育委員会、二〇二二年）

金理那「三国時代捧持宝珠形菩薩立像研究—百濟と日本の像を中心として—」『美術資料』三七（国立中央博物館、一九八五年）

久野健「飛鳥初期の彫刻」『月刊文化財』八七（第一法規出版、一九七〇年）

後藤怜「宝珠捧持菩薩像の変遷について」『奈良美術研究』四（早稲田大学奈良美術研究所、二〇〇六年）

齋藤理恵子「宝珠形装飾の起源とその思想」『仏教美術の研究』（里文出版、二〇一四年）

佐藤昭夫「菩薩立像」解説『那智経塚遺宝』（東京国立博物館、一九八五年）

全赫基「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『令和三年度鞠智城跡「特別研究」論文集 鞠智城と古代社会—第十集—』（熊本県教育委員会、二〇二二年）

竹森友子「吹上町田尻の金銅菩薩立像の伝来について」『黎明館調査研究報告』三三（鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇二一年）

内藤宋「コラム 山田寺五重塔に見る白鳳時代の舍利莊嚴」『開館一二〇年記念特別展 白鳳—花ひらく仏教美術—』図録（奈良国立博物館、二〇一五年）

長岡龍作「法隆寺—美術と祈り」『日本美術全集 第二卷 飛鳥・奈良時代 I 法隆寺と奈良の寺院』（小学館、二〇一二年）

西川新次「觀心寺の仏像（上）」『佛教藝術』一一九増大号（佛教藝術學會、一九七八年）

西川新次「觀音菩薩像（夢殿）」解説『奈良六大寺大觀 第四卷 法隆寺四』（岩波書店、一九七一年）

西住欣一郎「鞠智城跡貯水池跡について」『鞠智城跡II—論考編一—』(熊本県教育委員会、二〇一四年)

西村公朝「虚空いっぱいの宝をもつ仏」『魅惑の仏像14 百濟観音』(毎日新聞社、一九八七年)

松浦正昭「觀音菩薩立像」解説『特別展 菩薩』図録(奈良国立博物館、一九八七年)

松原三郎「四十八体仏—その系譜について」『古美術』十九(三彩社、一九六七年)

松原三郎「飛鳥白鳳佛源流考(二)」『国華』九三三(朝日新聞社、一九七一年)

町田甲一「法隆寺の夢殿本尊救世觀音立像と金堂四天王像について(上)・(下)」『国華』九九〇・九九一(朝日新聞社、一九七六年)

三田覺之「觀音菩薩立像(百濟觀音)」解説『特別展 法隆寺金堂壁画と百濟觀音』図録(東京国立博物館、二〇二〇年)

八木春生「中國南北朝時代における摩尼(宝珠)の表現の諸相」『佛教藝術』一八九(佛教藝術學會、一九九〇年)

八木春生「中國南北朝時代における摩尼(宝珠)の表現の諸相」再論『佛教藝術』二〇三(佛教藝術學會、一九九二年)

矢野裕介「最近の発掘から 貯水池跡出土・銅造菩薩立像—熊本県山鹿市・菊池市鞠智城跡」『季刊考古学』一一〇(雄山閣、二〇一〇年)

八尋和泉「吹上町田尻の金銅菩薩立像」『鹿児島県文化財調査報告 第五三集』(鹿児島県教育委員会、二〇〇七年)

山口隆介「觀音菩薩立像」解説『開館一二〇年記念特別展 白鳳—花ひらく仏教美術』(奈良国立博物館、二〇一五年)

【図録・大型図版】

『みやこの仏世界と豊の国』図録(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、

一九九六年)

『特別展 水城・大野城・基肄城築造一三五〇年記念 古代日本と百濟の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘』図録(九州国立博物館、二〇一五年)

『特別展 河内長野の靈地 観心寺と金剛寺—真言密教と南朝の遺産』図録(京都国立博物館、二〇二二年)

『日本遺産認定記念 菊池川二千年の歴史 菊池一族の戦いと信仰』図録(熊本県立美術館、二〇一九年)

『祈りの仏像 出雲の地より』図録(島根県立美術館、二〇二二年)

『日本美術全集 第二巻 飛鳥・奈良時代I 法隆寺と奈良の寺院』(小学館、二〇二二年)

『那智経塚遺宝』(東京国立博物館、一九八五年)

『特別展 金銅仏—中国・朝鮮・日本—』図録(東京国立博物館、一九八七年)

『特別展 法隆寺金堂壁画と百濟觀音』図録(東京国立博物館、二〇二〇年)

『聖德太子一四〇〇年遠忌記念 特別展 聖德太子と法隆寺』図録(奈良国立博物館・東京国立博物館、二〇二二年)

『特別展 觀音菩薩』図録(奈良国立博物館、一九七七年)

『日本佛教美術の源流』図録(奈良国立博物館、一九七八年)

『特別展 菩薩』図録(奈良国立博物館、一九八七年)

『開館一二〇年記念特別展 白鳳—花ひらく仏教美術』(奈良国立博物館、二〇一五年)

奈良六・大寺大觀刊行会編『奈良六・大寺大觀 第一巻 法隆寺』(岩波書店、一九七二年)

『市制施行七五周年・開館二十五周年記念特別展 ガンダーラ 仏教文化の

姿と形』図録（松戸市立博物館、一〇一八年）

「成果報告書」()までわかつた鞠智城』（熊本県教育委員会、一〇一三年）より引用

【書籍】

猪川和子『日本の美術 一六六 觀音像』（至文堂、一九八〇年）

上原昭一編『日本の美術 二一 飛鳥・白鳳彫刻』（至文堂、一九六八年）

大西修也『日韓古代彫刻史論』（中國書店、二〇〇一年）

加島勝『日本の美術 五四〇 柄香炉と水瓶』（ぎょうせい、二〇一一年）

河田貞『日本の美術 二八〇 仏舍利と経の莊嚴』（至文堂、一九八九年）

久野健『古代小金銅仏』（小学館、一九八二年）

熊本県教育委員会編『熊本県文化財調査報告 第二四九号 鞠智城跡総括報告書』（熊本県教育委員会、二〇〇九年）

熊本県教育委員会編『熊本県文化財調査報告 第二七六集 鞠智城跡第八

（三十二次調査報告 鞠智城跡II）（熊本県教育委員会、二〇一二年）

熊本県立裝飾古墳館編『鞠智城 須叟之際の千三百年 夢甦る百濟菩薩立像』（熊本県立裝飾古墳館、二〇〇八年）

敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟 第一巻』（平凡社、一九八〇年）

敦煌三郎・田邊三郎助『小金銅仏』（東京美術、一九七九年）

水野さや『韓国仏像史 三国時代から朝鮮王朝まで』（名古屋大学出版会、一〇一六年）

鷺塚泰光『日本の美術 二五一 金銅仏』（至文堂、一九八七年）

家永三郎・藤枝晃・早島鏡正・築島裕編『日本思想大系 二 聖德太子集』（岩波書店、一九七五年）

插図

- ・第1、2、4、7図 熊本・鞠智城跡出土銅造菩薩立像 筆者撮影
- ・第3図 鞠智城跡出土銅造菩薩立像 推定復元図（大西修也氏作成）
- 出典・大西修也「百濟の仏像と東アジア」「鞠智城シンポジウム二〇一

・第5図 法隆寺献納宝物第一七〇号（東京国立博物館蔵）左側面

出典・東京国立博物館 研究情報アーカイブズ 画像検索
(<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0043777>) 一〇一一年

・第6図 中国・四川省成都万仏寺跡出土普通四年銘釈迦文石像 筆者撮影

・第8図 敦煌莫高窟第一八五窟北壁 二仏並坐像脇侍菩薩
出典・敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟 第一巻』（平凡社、一九八〇年）より引用、トリミング

謝辞

本稿の執筆にあたり実施した調査において、成城大学教授 岩佐光晴先生より懇切丁寧な御指導を頂きました。また、熊本県立裝飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館 長谷部善一館長、宮崎敬士主幹、亀田学主幹、熊本県立裝飾古墳館 坂口圭太郎主幹をはじめ、多くの方から御協力、御助言を賜りました。末尾ではありますが、この場をお借りして深く御礼申し上げます。